

学習会報告



「特別支援教育における ICT 活用について」

—活用と実践で大事にしたいこと—

講師：東北福祉大学 教育学部 教育学科
准教授 杉浦徹先生



10月29日、オンラインにて
第2回目の研修会を行いました。
テーマは「ICT 活用」。

GIGA スクール構想の実現によって、
児童生徒向けの一人一台端末環境が
急速に整いつつある中、このような環境
を私たちはどのように捉え、活用してい
けばよいのか、教員一人一人が抱える
不安も少なくはありません。特別支援教
育における考え方や留意点、実践例に
ついてお話いただきました。

その子を中心に支援機器を考える

知的に障がいをもつ児童・生徒は、
学習によって得た知識・技能が断片的
になりがちで生活場面に生かすことが
難しいということや、実際の体験が少
なくなりやすいということはよく知られて
います。ICT を活用するにあたって、児童・
生徒の概念形成や言葉の理解をたす
け、「成功経験」や「人とつながる経験」
を補助するためのものであることを確
認しました。

そのため、機器に児童を合わせるの
ではなく、絵カードや VOCA など従来
のツールによって、児童・生徒がコミュ
ニケーションの意味と利点を体感した
上で、必要に応じてタブレット端末に移
行していくことが望ましいという話を
いただきました。

発達レベルとリアリティー

支援機器検討チャートにより、「発達レベ
ル」と、「操作レベル」、そして「活動のリアリテ
ィー」（どれだけ実体験に近い活動であるか）
の3つの座標軸で考えるという視点を学びま
した。例えば、ある児童・生徒にとっては便利
で面白い楽器アプリであっても、障がいの程
度が重い児童・生徒にとっては、操作と結果の
因果関係がつかめないと、豊かな経験にはな
りません。児童にとって分かりやすい支援とな
っているかを見直す指標として、とても参考に
なる考え方でした。

使いながら学んでいく

ICT 活用による危険性を加味した上で、社
会に出てから初めて使うのではなく、在学中
に、実態に応じた情報モラル教育と並行して指
導していくことが大切です。児童・生徒も教師
も、実際に使いながら学んでいくことを積極的
に行っていくことが必要であると感じました。

「ICT 活用における専門性」とは

それは、「ICT に詳しい」ことでも「技術に長
ける」ことでもありません。目の前の児童・生徒
に対してどのような力の育成を目指すのかを
明確にし、それに向けて学習活動を設定し、そ
こに必要な ICT を取り入れる実践力です。児
童・生徒がICTを活用していけるようになるこ
とで「今ある力で人や物に働きかけていく」こ
とが可能となり、そこから社会につながって
いく、その可能性を広げることが大事であると分
かりました。



「ICT も言葉」

私たち教師が共生社会をイメージし、児童・
生徒の自立に向けて、目的を見極めながら
ICTによる支援方法を検討していくことの大切
さを改めて実感した研修会でした。「教材は言
葉」であり、「できた。」ではなく、「できてうれ
しい!」という気持ちを育てる視点を忘れずに、
ICT 活用に取り組んでいきたいと思ひます。